

第 272 回研究報告会（6月27日）

「沖縄の文化と天理教」

(元天理教沖縄教区長・元天理教那覇分教会長)

山口國三



沖縄では何故三十三回忌で終わるのだろうか？

以前からこれが不思議だった。お寺の坊さんに尋ねてもお宮の宮司さんに尋ねても、「確かにお寺やお宮は五十回忌で終わるが、沖縄では古くからの慣習として、三十三年で終わらせている。その理由はよくわからない。」という返事だった。たぶん親が出直（死亡）してから50年も生きる息子は少ないだろうという理由からで、我々の先祖の叡智だろうということになった。

ところが靖国神社を調べていると、松平永芳宮司の話として、死後30年も経てばいかなる悪霊も浄化されるという古神道に則り、永久戦犯者は昭和23年に処刑され30年も経てば浄化されたという理由から昭和53年に合祀したと、書いてあった。これを読んで沖縄には古神道が今も残っていることが分かった。

私は霊媒信仰も古神道ではないかと考えている。沖縄は戦国時代より本土とは頻りに往来があった。沖縄の言葉に今も候(ソウロウ)文が残っている。また「アケツ飛びかひ」は今や本土の人にはさっぱり分からないだろうが、私達には「トンボが飛び廻っている」という意味だとすぐに理解できる。このような理由から、沖縄では三十三回忌で最後の焼香をする理由が分かった。

一方、1392年には閩人(ミンジン)三十六姓が文化指導員として中国文化を沖縄に持ち込んだ。その中に道教(火の神)や儒教、風水の知識も一緒に入って来た。そして、錦を着飾って帰るという思想から、洗骨の習慣も入って来たらしい。沖縄の歴史は記録に残るのは一千年史だが、それ以前も頻りに往来があったようで南総平家(平家が源氏に追われたこと)等明確なものがある。

とにかく本土にはない中国文化の影響を受けているものが多々ある。沖縄の路の十字路に石敢當が立っているのも、その一例である。

沖縄には日本の古神道と思われるものと道教とが混然となった火の神に対する根強い信仰がある。

沖縄では本家(元家)の一番の上座敷に床の間があり、その右側に「ウカミ」という神床を祀る。そこに御香炉・ゆし木(神繩の榊)またはクバ扇木が供えられている。いわゆる、「火・水・風」で、沖縄では、「天・地・海」ともいわれる。その本家の竈(カマド)の灰をもらい、分家の竈の綺麗な処に御香炉と3つの小石を並べて火の神として祀り、毎朝水と塩を供え、特に旧の1日と15日は3つの木碗に白い御飯(ウブク)を盛ってお供えをする。

火の神は女性であることから、朝、火の神の前に出る時は決

して寝間着のまま、髪もザンバラ髪のまま出て来てはいけない。火の神の前で夫の悪口を言ったり、子供を叱ってもいけない。

火の神は常時私たちを見ておられることから、水瓶から汲み取った水が柄杓に残ってもその水は捨ててはいけない、さらに残った水は水瓶に戻さない、また火の神は女性だから夕方になったら勝手口は早く閉めなさい、等々と伝えられてきている。

沖縄の信仰は霊媒信仰に特徴があり、霊に関する熟語が多い。「幼死」(ユースー：初めての子を中絶したり、幼い子を死なせてしまうこと)、「長子押し込め」(チャチオシコメ：第1子の男子を粗末にしてその子に後を継がさない状態のこと)、「女元祖」(イナグガンス：“行かず後家”や“出戻り女”と言われる女性のこと)、「継降」(チヂウリ：親の心の中にある悪い面が次世代、特に3代目の子に具現化すること)、「冷元祖」(ヒジュルガンス：跡目がない位牌)等々、その一つ一つに深い意味合いがある。

沖縄の女性は長生きで健康、そして家の実権を握っているのが現役である。「火の神」や「トトローメー」(位牌を収納する木枠)を対象として常にストレスを発散してきたのである。

たとえば「火の神」に対し、自分の「御願不足」のために夫や子どもに「継降」の苦悩を負わせ誠に申し訳ない、と後にいる人に聞こえるくらいに大きな声を出し、夫や子どもを責めることなく、自分自身を責めて納得しつつ発散し、拝みごとに夢中になる。このように、沖縄の女性は己のストレスを発散させている。

那覇分教会の山口康貞2代会長はその辺のことを理解し、本家の神様は「火・水・風」であり、神様は人間の「陽気ぐらし」を待ち望んでおられ、それを邪魔するのが「心の埃」だと論ず。そのようにして、「元の理」や「十全の守護」を分かりやすく説き、「継降」を「因縁事情」と説いた。余程説き分けが上手だったらしく、渾名を「大和ユタ」と呼ばれていた。

私は若い頃、「どうして『継降』の詳しい理由がわかるのですか」と尋ねたことがある。その答として、「へんな学問をして年がら年中あれこれを考えている君達に何がわかる。年中あの人はどうしたらたすかるか、教祖の思召は何かを思いつめておれば、神様が言わして下さる。」と返って来た。「母親がしっかりしてない家は、やがてがたがたになるから、母親にしっかり信仰をもってもらおうよう仕込まにゃならん。」とも言っていた。

沖縄は男性原理で、女性優位な社会である。祝女(ノロ)や根神(ニーガミ)は父系親族集団の中から継承者として選ばれるが、祭祀を担当するのは女性である。

また、巫女(ユタ)は庶民の私的な呪術信仰の領域に関与し、「ウマリ」・「サーダカウマリ」(“感受性の強い人”の意)のように、甘えたい時機に甘えられなかった人の性格から来る霊的な不安定性から悟りを得た人で、ほとんどが女性である。

「継降」は「いんねん」の論しで納得させ、「たんのう」とは「つくし・ほこび」で発散することであると教えた。私たちの小さい頃は、「おつくし」も「ひのきしん」と言った。

沖縄で天理教の教えを広めるとき、ストレスの発散を「たんのう」や「ひのきしん」で説き分けていたのである。